

# 本を選ぶ

NO.396 2018年(平成30年)5月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

- <ろん・ぼわん>アナログ
- 司書の眼 第3回
- 帰ってきた図書館員 (54)
- 鳥の目 68
- 図書館を離れて (第3回)

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

## アナログ

大都市圏の通勤時に電車に乗っていると、座っている人はもちろん、立っている人も乗客の半数以上が携帯電話の小さな画面に見入っている。スマートフォンだけではない、ガラケーも見かける。ちょっと不気味なくらいだけれど、もはや見慣れた光景だ。中年以下の男性の多くはゲームか漫画に夢中な様子。電子書籍出版のエンジンとなった劇画が日本固有の現象を生んでいるようだ。一方で携帯小説というのもあって、若い女性たちが想定読者層なのだろう、みな一様にうつむいたまま液晶の画面の世界にすっぽりはまっている。朝の新聞をごわごわとたたみ込んで、紙面のあちこちに視線を泳がせるオジさんたちはすでに珍しい。

大草原の小さな家シリーズの1冊『長い冬』(ローラ・インガルス・ワイルダー作／岩波少年文庫／2000年)に、リヴィングストンの『アフリカ探検記』が登場する。一家は連日の吹雪に閉じ込められてしまう。すべてを切り詰めて厳しい冬を乗り越えなくてはならない。強い吹雪の朝、吹きすさぶ風にたじろぐ家族の気晴らしにと、父さんがアフリカの本を読もうと言い出す場面だ。知らない本だったので図書館で探すと、すぐに見つかった。河出書房新社から1977年に翻訳出版されていた。

ところがこの本の奥付を見て驚いた。1877年9月10日初版印刷、1977年9月15日初版発行とあるではないか。活版印刷の時代だから文選工が活字を拾い、植字工が組み版をつくる。その過程でローラ一家がまさに生き抜いた日付が登場するのは、なんだか人間くさい偶然の話だ。

アナログな時代がいいというわけではないけれど、一方で完全デジタル化した大新聞で珍妙な誤りがちょいちょい掲載されれば、何かがあるように思えて来る。例えば「北緯37度75分」などというのを見かけたが、校閲者が画面でちらりとなでただけで通してしまったのだろうかと思推す。「北緯37度45分」の誤りでしたと、翌々日に訂正が出た。他にもある。ツール・ド・フランスを「自動車ロードレース」ときた。もちろん、翌々日に「自転車レース」と訂正が出ている。

時折、公立図書館の書架でもおやと思う。棚が整然としているのだ。分類番号順に実に見事に並んでいる。規則に従ってきちんと配架されていて何故悪い、と言われれば、きちんと並んでいるからだと言うしかない。それはむしろ違和感に近い。大学図書館や専門図書館なら当たり前なのに、まちの図書館だとどうしてなのか、面白くない。ただ分類番号通りに整列している。言うなればすっかりデジタル化させられてしまったかのようだ。

書架を見ればその図書館の大凡が分かる、とベテランの司書にかつて聞いたように思う。棚を生き生きさせるために感覚を研ぎ澄ませると、必ずしもデジタルにはならないという話だった。(埜村 太郎)

# 司書の眼 第32回

## － 850語の英語教授法－

鷹野 祐子

ひょんなことから、初等英語の教授法を習うことになった。GDM英語教授法という「英語を英語で習う教授法」で、GDMとはGraded Direct Method (段階的直接法)の略称である。妊婦さんの糖尿病 (gestational diabetes mellitus) とか「グループダイレクトメッセージ」は関係がない。

GDM英語教授法は、1940年代から60年代にかけてハーバード大学でI.A. リチャーズ博士とクリスティン・ギブソン女史が、BASIC Englishにもとづいて開発した。BASIC Englishとは、イギリスと心理学者C.K. Ogdenにより草案されたもので、1930年に現在の形の850語になった。時代的に、第二次世界大戦での連合国の勝利もあり、多くの国、特にアジアにおける英語教育に利用され、日本でも英語教授法としての実績がある。現在も日本ベーシック・イングリッシュ協会がGDM英語教授法研究会と一緒に普及・研究活動をしている。

### ケンブリッジの博識家

BASIC Englishでは、わずか850語で普通のことなら何でも自然な英語で表現できる。なぜこんなことが可能になるのかというと、重要な思想や、基本的な感情、社会生活上必要な情報の交換に欠くことのできない最低限度の語を英語の中から探し、それを自由に駆使することによって簡単にい表すことができるように作られているからである。リスニングやリーディングの練習によく利用されるボイス・オブ・アメリカ (VOA, <https://www.voanews.com/>) を聞いたことがある方も多いだろう。アメリカの歴史やニュースを放送しているサイトで、英語を母語としない人々に向け、平易な語彙と文法を用いた上で、通常よりもゆっくりアナウンサーが語る。このVOAで用いられているのが、スペシャル・イングリッシュであるが、BASIC Englishはこの基になっている。BASIC Englishの構成は、動作に関する100語、物事に

関する一般的な400語、視覚的な200語、状況に関する一般的な100語、状況に関する相対する50語の850語からなっている。まず、動詞に関しては、日常英会話に必要な動詞は16個としている。つまり、be、come、do、get、give、go、have、keep、let、make、put、say、see、seem、send、takeの16個の動詞でほとんどすべての動作が表現できるのである。

BASIC Englishを作ったC.K. Ogdenについては、いろいろ逸話がある。1912年ケンブリッジ大学の学部生の時に *The Cambridge Magazine* という雑誌の発行を開始した。Ogdenは、幅広い人脈を持っていたので、誌面には政治・経済・宗教・文芸・科学など多岐にわたる分野が取り上げられた。1914年に第一次大戦がはじまると、イギリス内のニュースだけでなく、200種類もの外国の新聞雑誌から記事を要約して載せ、敵国であるドイツのニュースまで掲載しイギリスの刊行物に欠けている情報を補った。Ogdenは学部卒業後も10年ほどこれにたずさわり、ケンブリッジの知的運動の中心人物であった。*The Cambridge Magazine* が終刊すると、Psyche という心理学の雑誌の創刊メンバーとなり、後に編集長として論説その他おびただしい数の記事を書いた。心理学から徐々に言語学に焦点が移り、1930年にこの誌面上でBASIC Englishが発表された。Psycheは季刊誌から年刊になり、第二次大戦の開戦2週間前に17号が発行されてから14年後の1952年に18号が発行され終刊となった。日本でも東大、一橋大など10館ほど所蔵がある。最後の18号は長い間絶版となっていたが、1995年にイギリスの出版社と紀伊國屋書店が共同で復刻版を出したという。

C.K. Ogden自身も、「ケンブリッジの博識家」と形容されるほど、幅広い分野を理解している思想家であった。編集、翻訳のほか、心理学、美学など無数の論文を残している。1926年に「ブリタニカ百科事典」の13版の補完が3冊出版された時には、2、3晩でこの書評を書き100人以上の名前について掲

載の可否を批評し、2桁以上の固有名詞の綴り間違いを指摘したといわれている。独学でヘブライ語、イラン語、シリア語、アルメニア語などあまり知られていない外国語をいくつも学び、音やストレス、リズムを研究した長い論文も書いている。Ogdenの部屋は本で埋め尽くされ「雑誌や冊子の山の端を一步一步踏んで2階の部屋に入る・・まわりの本棚の本の種類は無限と言えるくらいで、さっと見ても夜が明けそうだ」と言われたが、すべての書籍に多くの紙片が挟まれ、細かく書き込みがしてあった。彼の蔵書には、貴重な初版本などが含まれ、現在は、ロンドンのUniversity CollegeやカルフォルニアのLA校、何か所かの大学図書館内にOgden Archivesとして残っている。

### 英語以外にも応用可能

Ogdenの作ったBASIC Englishを使ったGDM英語教授法では、教科書に「絵で見る英語1～3」(I・A・リチャーズ、クリスティン・ギブソン(共著)、IBCパブリッシング)を使用する。この本の初版は1945年、現在でも書店で平積みされる大ベストセラーである。一番初めはIとYouを学ぶ。本ではピクトグラムのような棒人間が書いてあるが、教室では先生と生徒が向かい合い、「I」といながら自分を指さす。次に「You」と言いながら正面の生徒を指さす。次に生徒の手をとって生徒自身を指さし、「I」ということを促す。そして、先生は生徒に先生自身を指ささせ「You」を言わせる。IとYouが理解できたら、その辺の男性を指さして「He」、女性を指さして「She」。それが理解できたらテーブルやいすなど大きな単体を指さして「It」を理解する。GDMでは、何かセンテンスを言わせるために場面を用意する。それをSEN-SITs (sentence-situations)と表現する。先生は生徒が自然に迷わずそのセンテンスを発するような場面を作りつつ、新しいセンテンスを教えていく。まさに、日本語を介さず英語を教えるのであるが、そのために場面を限定的に設定し、新しい言葉はいつも一対(HeとSheやThisとThatなど)で用意して提供していく。

どんな母語であっても、迷わず言語を習得できる方法がGDM法と言えると思う。もちろん、これは英語だけでなく中国語、フランス語、ドイツ語、ロシア語等にも応用されている。

### Do The Hokey Pokey

4月になって末の子が小学1年生になった。これで保育園の送迎も終わったかと思ったが、登校初日に学校から電話があった。どうやら「教室にいられない子」となったらしい。その兆候は入学式からあり、式中ずっと後ろの席にいる保護者を振り向いていて、となりの子に注意されていたし、集合写真では変顔をしてカメラマンを困らせていた。

保育園時代は、モンテッソーリ教育+自然保育で6年間育った。モンテッソーリ教育というのは、最近では将棋の藤井聡太棋士が学んだというので有名になったが、簡単に言えばそれぞれの「敏感期」にあわせた教具を使った「お仕事」をする教育法である。教具はまさにSEN-SITsに作られていて、視覚で数を知る1000個のビーズ、触覚で文字を覚える砂文字、自分で自分の間違いに気が付く仕掛けがある教具を用いる。とにかく子ども本人が興味をもったもの(だけ)を取り組むので、無理に座らせて作業させるということはない。そんな自由な環境で育ってきた子供が、教室で決められた自分の机に座り、言われたことを黙ってする、というわけがないのだ。幼稚園などでは一斉に絵画や作業をすることが多いのか、ほかの子は黙って先生の指示に従っているのが不思議である。

学校に呼び出され、特別支援の先生と面談を行った。最近の療育ではまさにSEN-SITsな取組をしている論文を多くみる。言われてみれば、過集中や聴覚刺激より視覚刺激の方に敏感とか発達上の特徴がでてくる。親とすれば単に楽しく学校に行ってくれればいいなと思うのである。ちなみに出来上がった集合写真はどうかしてちゃんと真面目な顔をしていた。カメラマンさんに腕に感謝したい。(たかの ゆうこ：医学系研究所図書室)

# 帰ってきた図書館員 (54)

—食にまつわる本が気になります—

山下 青葉

『残念和食にもワケがある—写真で見るニッポンの食卓』(岩村暢子著／中央公論新社／2017)を読んできて以来、食をめぐる問題に関心が向かい、関連する図書を読む日々となっている。

## 問題はいたるところに

そんな中読んだのが『怖い中国食品、不気味なアメリカ食品』(奥野修司・徳山大樹著／講談社文庫／2017)であった。

この本は2013年から2014年にかけて「週間文春」誌上で行われた「中国猛毒食品キャンペーン」の取材記事に大幅加筆、再構成したものである。

このタイトルからわかるように、内容のほとんどは「怖い中国食品」で占められており、アメリカの食品問題(アメリカ産の牛肉に日本国内では禁止されているホルモンが多量に含まれているということ)は全体の3分の1くらいという印象である。

中国食品の問題といえば、冷凍ギョーザの中に農薬が混入されていた事件や、マクドナルドのチキンナゲットに消費期限切れの鶏肉が使われていた事件が思い出され、それは製造していた工場に問題があったということとされていたと思うが、加工食品のみならず、米や野菜、水産物など中国から輸入されるあらゆる食品に、作られる段階から問題があるというものだ。

著者は中国で1万キロを超える現地取材を行い、その問題の内容を報告している。

その中で、米を例にあげると、福島原発事故以来、国産の米より外国産のものの方が安全という風評が広がり、米の輸入が増えた。しかしもともと、煎餅などの菓子類に使われる加工食品用の米は少なからず中国からの輸入によるところが多かった。

その米の生産現場は鉱山や工場の排水の垂れ流しにより汚染された川の水や危険な農薬の使用により土壌が重金属にまみれていることが指摘されているが、著者が実際に取材した吉林省の米農家の集落でも、明らかに鉱山の大理石や鉄鉱石を含む水を田ん

ぼに撒いていたり、そもそも田んぼ自体が農薬の瓶や長靴、ビニール傘などでまるでゴミ捨て場のような状態になっている様子が書かれている。

近年、人口比率からいえば少数であろうが、中国人のモラルが低下し、金になりさえすればよいという拝金主義が起こっており、この問題についても農業に携わる人の考え方の問題が取り上げられていた。中国では私有地が認められていないので、自分の土地だから良くしようという発想にならないので、国をあげて解決しようと思わなければ、問題がなくなることはないのではないか。

と、ここまで原稿を書いていたところで、また「週間文春」で「危ない中国食品」の特集が始まった。

特集は4月末までの段階で、3週連続で掲載されており、「直近3年間の『野菜』『魚介』『肉』厚労省違反リスト」(第1弾)、「最新回収事件実名リスト」(第2弾)、『『危ない中国食品』はこうして見破れ!』(第3弾)というタイトルになっている。

記事によると、昨年の夏から秋にかけての長雨や日照不足で野菜が不作になり、中国産の生鮮野菜や冷凍野菜の輸入が急増したのだが、相変わらず、残留農薬や大腸菌、カビなどで汚染されており、要注意と警告している。

## 人任せには出来ない

日々の食事を大事にするということ以前に、まず使用する食品の原産地から確認しなければならないとは難儀なことであるが、自分自身や家族の健康を守るためには必要なことなのであろう。

食にまつわるいろいろな本を読んでみて思ったのは、複雑な時代を生きている我々は、身体に入る物に無関心ではいけないということだ。

文庫本の方で1章分を割いて書かれていたが、学校給食でも危険な中国食材の使用が増えていることが問題視されている。未来を担う子ども達の健康を守ることも私達大人の義務ではないか。

(やました あおば：図書館員)

# 鳥の目 68

—ヤンバルクイナと妖怪伝説 世紀の発見—

## 為貞 貞人

今日、「生物多様性」や「持続可能な社会」の問題を契機に、人間と自然の関係の多様性・多元性がさまざまな角度から論じられ始めています。人類学と環境文学との対話から人間と鳥との関係を見直す試みとして『鳥と人間をめぐる思考』（野田研一・奥野克巳編著／勉誠出版／2016年）が出版されたのもその一つです。

この本の第3部「鳥をめぐる人類学」の第12章「アガチャーとキジムナー — ヤンバルクイナの生態学的特徴と沖縄の妖怪伝説」（島田将喜・宮澤楓）は、沖縄の人びとがヤンバルクイナとかかわった歴史の中で形成した自然観を考察しています。

1981年末、沖縄本島北部のやんばる地域で発見されたクイナが新種と認定され、ヤンバルクイナと命名、発表されました。モーリシャス島のドーダーが絶滅して300年余、同じ飛べない鳥の発見は、世界的にも大きな反響を呼びました。

やんばる地域は国頭村、東村、大宜味村の集落（3村の合計面積240km<sup>2</sup>）からなり、イタジイ（スダジイ）やオキナワウラジロガシを主体にした深い照葉樹林のやんばるの森と青い海にはさまれて点在し、独特の生態系と特徴的な歴史と伝統文化を形成しています。やんばるの森には、特別天然記念物のノグチゲラや天然記念物のヤンバルテナゴコガネなど多くの固有種が生息します。

ヤンバルクイナはツル目クイナ科に属し、全長35cm、背、尾の上面が暗いオリーブ色、顔やのどが黒く、のどから腹にかけ白いしま模様があり、くちばしと足が太くて赤く、「キョキョキョキョ」と連続した鋭い声で、夕方ごろ頻りに鳴きかわします。体重と比翼が小さく、翼の筋肉が貧弱なので飛ばません。

### 沖縄独特の自然観

ヤンバルクイナの発見後、地元の人たちや山仕事をする人たちの間で「アガチャー」や「アガチ」（「せわしく動く人、働き者」の意味）と呼ばれる鳥が以

前から知られていたという話が聞かれるようになってきました。一方、やんばるの村落に古くから伝わる昔話に「キジムナー」「キムジン」（「木の精」の変化）と呼ばれる妖怪が現われます。キジムナーは子どもの姿で、全身が猿のように毛でおおわれ、赤または黒く、髪は朱色で長く伸びています。そして、多くの話の中で一般的には、ガジュマルのうろに住み、普段は森にいて夜歩いて海辺や川辺に出て貝や魚を捕って食べ、貝殻を残すというイメージがもたれています。

島田・宮澤両氏は、森が海岸まで迫り、その狭間に存在する集落に長く伝わる妖怪伝説の成立に、鳥でありながら飛ばず、決まった時間に大声で鳴き、森と集落の間を往来するヤンバルクイナの影響があるとの仮説をたてます。そして、やんばるの森と住民との歴史的なかわりや、一般の鳥と異なるヤンバルクイナの生態や行動の特徴を分析、さらに沖縄の昔話全体（582話）からみたキジムナーの特徴を社会的ネットワーク分析の手法で検証し、キジムナーが出現する昔話は、沖縄在来に限られた、しかも沖縄を代表する動物、貝や魚との関係を維持しており、沖縄固有の要素が強く残されていることを確認しました。

この結果、キジムナーがヤンバルクイナの変形として、この全く異質なものの関連性が、①両者が森と人間の生活環境の間を行き来する境界的存在であること、②無飛翔・二足歩行性で、カタツムリを石にたたきつけて殻を割って食べる行動（道具使用）などにより推論されています。

ヤンバルクイナの「奇跡の発見」から37年、懸命な保護増殖事業によりその生息数は回復傾向にあります。絶滅の可能性が高い絶滅危惧1A類（環境省レッドリスト）のままです。

現在、やんばるの森では東村高江地区を取り囲むように6か所で米軍のヘリパッドの建設が進み、やんばるの森は鳥と人間が出会う平穏な「境界」を失うおそれがあります。本論文は最後に、やんばるの森を守ることは、キジムナーにつながる沖縄の人々との独特の自然観と歴史と文化を守ることだと人類学の視点から指摘しています。

（ためさだ さだと：さいたま市図書館友の会）

## 図書館を離れて (第39回)

—「ちびくろさんぼ」のドーナツ 4:「ちびくろさんぼ」のはじまり—

並木 せつ子

前回93点になった「ちびくろさんぼ」に新たな何点かが加わって100点を超えた。今回はドーナツやホットケーキを離れ、別の視点から一覧表を見ていきたい。

今は当たり前になった「ちびくろさんぼ」という名称は、いつから使われるようになったのだろうか。もしかすると周知のことだったのかもしれないが、私はこの一覧表を作る作業の中で、初めて1953年の「岩波の子どもの本」(光吉夏弥訳)が最初、ということを知った。冒頭の“Once upon a time there was a little black boy, and his name was Little Black Sambo”は〈あるところに、かわいいくろんぼのおとこの子がいました。なまえをちびくろさんぼといたしました〉と訳されている。これが「ちびくろさんぼ」のはじまりだった。では、1953年以前は、どのように訳されていたのだろうか。以下が冒頭部分の訳文である。

1907年『東西お伽噺』の「ザンボーの手柄」は、〈昔しむかし或る處に一人の小さな黒ん坊の子供がありました、而して其名は小黒サンボーと申しました〉。

1924年『赤い鳥』の「虎」は、〈小さな、黒ん坊の男の子のザンボーが、・・・〉。

1927年～(?)『黒坊物語』は〈マックロクロノクロ坊ハタイソウリカウナクロ坊デシタ〉で始まる。(この本は著者、出版社、出版年不明だが、戦前のもので1927年以降の出版と推定した。理由は後述する)。

1929年『十二の星』所収の「虎」は〈小さな黒ん坊の子のザンボーが・・・〉。

1931年『童話教育2(2)』(三村良輔訳 童話教育社)所収の「黒坊のサンボー」は、〈あついあつい南の国の田舎に、サンボーと云ふ黒坊の子がゐりました〉。

1937年『ツバメのオウチ』の「クロンボノサンタクントトラノオハナシ」ハ〈ムカ

シ アフリカニサンタクントイフクロンボノコドモガアリマシタ〉。

1937年『コドモノクニ』の「ザンボー 虎」は〈ザンボーハ、小サナクロンボノコドモデス〉

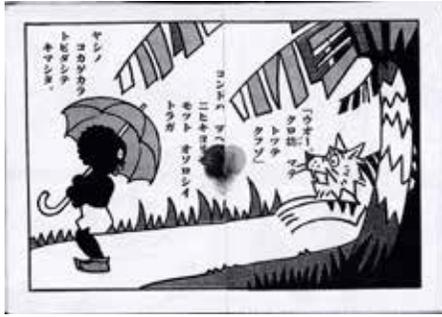
1949年『アメリカ童話集 天がおこちてくる』(しまてるお文 世界社)の「くろんぼさんぼー」は〈むかし、むかし。あるところに、こどもの、くろんぼがいました。なまえは、くろんぼさんぼーと、いいました〉。

1950年『鈴木井三重吉文庫』の「ザンボーと虎」は、基本的に『十二の星』の「虎」と同じ。

1953年『幼児保育紙芝居全集』(福島のり子文井口文秀絵 教育画劇)の「ザンボーととら」は、〈お日さまがかんかんてりつける、ここは南のお国です。くろんぼうの子ザンボーは、・・・〉。

こうして見ると名まえの“Little Black Sambo”は、最初の「サンボーの手柄」の小黒サンボーと「くろんぼさんぼー」以外は、どれも「サンボ」「サンボー」「ザンボー」など、Samboの部分だけで呼ばれていた。それが「岩波の子どもの本」以降、統一されたかのように「ちびくろさんぼ」という名まえになり、書名にも「ちびくろさんぼ」という名称が並ぶようになる。これは1986年『げんきなサンボくん』(矢崎節夫文)、1989年『ブラック・サンボくん』(山本まつよ訳)が出版されるまで30年以上続く。1988～89年に各社が絶版にした後しばらくして出版された、1997年の『おしゃれなサムとバターになったトラ』、『トラのバターのパンケーキ』のババジくんはまた別の話である。

その他に興味深かったのは、この頃までは両親の名まえであるマンボやジャンボをあまり使っていないことと、「オカアサマ、オトウサマ」や「・・・していただきました」のように、丁寧な言葉使いや敬語が多いことである。教育的な意味合いがあったのだろうか、上流階級の子女を読者対象としてとらえていたからなのか。戦後はほぼお母さん・お父さんになり、1968年にママ・パパが初登場す



で、主流はやはりお母さん・お父さんだった。

最後に『黒坊物語』を、なぜ1927年以降と推定したのか？ 図は『黒坊物語』の一部だが、ドビ

アスの絵にそっくりである。岩波版でも、瑞雲舎版でも、径書房版でもよいから、ドビアスの絵と比べてみると、絵ばかりか構図まで同じであることに気づく。これはドビアスの絵と言ってまちがいないであろう。アメリカで、ドビアスの絵によるマクミラン社版が出版されたのは1927年。そして、カタカナ書きの文章なので、おそらく戦前のもの。というわけで大雑把ではあるが、1927年以降1945年以前の本と推定したのである。

アスの絵にそっくりである。岩波版でも、瑞雲舎版でも、径書房版でもよいから、ドビアスの絵と比べてみると、絵ばかりか構図まで同じであることに気づく。これはドビアスの絵と言ってまちがいないであろう。アメリカで、ドビアスの絵によるマクミラン社版が出版されたのは1927年。そして、カタカナ書きの文章なので、おそらく戦前のもの。というわけで大雑把ではあるが、1927年以降1945年以前の本と推定したのである。

(なみき せつこ：元図書館員)

\*図版は『黒坊物語』(大阪府立中央図書館国際児童文学館蔵)